

私の心を動かした真夏の夜のお話

二年 梶山恵理華

夏には特有の日差しがある。肌を刺すように鋭く、見上げられない程にまぶしい。そんなカンカン照りの太陽が隠れた八月の夜に起こった出来事が、私の心を大きく動かした。

六年生の八月、真夏のある日。私は二年ぶりの故郷、中国で、久しぶりに顔を合わせた親戚と会話を弾ませた。一日中遊び尽くしたその日の帰り道、歩道を歩く一匹の老犬に私は目がいった。よく見ると息は荒く、片方の足を怪我しているのか重そうに引きずっていた。首には色褪せた首輪が付いており、誰かに飼われていた事を証明していた。

「ダメ！なんて近付こうとしてるの！」

誰が見ても助けたくなくなってしまふ彼に近付こうとした瞬間、親戚のおばさんに言われた。あからさまに驚いたまま、顔を向けると、追い打ちのようにもう一言。

「汚いでしょ、普通は誰も近付かないよ。」

あまりにも信じ難い二文字。呆然としながら視線を周りに移すと、通り過ぎていく人の群れが、何よりも「普通は助けない」という言葉を表していた。心なしかさつきよりも苦しそうに呼吸を繰り返していた。

る老犬を見て固まってしまった。助けてあげたい。でも見られるのが怖い。目立つのが怖い。同じ言葉が頭の中をぐるぐると巡って、迷ったあげく、私は伸ばしかけた手を引つめた。

(ごめんね。)

心の中で一言。通り過ぎていく人の勢いに負けてしまった自分に悔しさと不甲斐無さを覚えたまま残りの日にちを過ごした後、私は羽田空港行ききの便で日本へと帰国した。

時は流れて中学一年生の冬。男性二人が道端に倒れた一匹の老犬を助ける動画をネットで見つけた。その動画の老犬と、一年前に自分が見た老犬が思わず重なって、あの時の気持ちフラッシュバックした。

(私にもっと勇気があればよかったのに。)

中学一年生になった私かもしれないあの場に居たとしても、行動はきつと微塵も変わらないだろう。動物の殺処分をテーマとした番組を見た時、「なんて酷い」「最低だ」と、まるで人事のように思っていたが、それと今の私はいったい何が違うのだろうか。「私は何か出来たの？」と自分に問えば、返ってくるのは「何も出来ていない」だけ。その時、私はその人達となら変わらない「同類」なのだ気が付いた。エアコンから吹き出る温風が頬にやけに厳しく当たったような気がした。

命の大きさは、人によって見え方が変わる。同じ命を見ているはずでも、大きく見える人もいれば、小ささを感じない人もいる。しかし、見捨ててもいい命など一つもない。「普通」という安くて易い二文字で見えて見ぬふりをされる野良犬や野良猫も、「仕方ない」という自己中心的な言葉で殺処分される元ペット達も、きつと私達が見方や考え方を少し変えるだけで、救えるはず。そんな勇気ある私に変わっていききたい。私は、真夏の夜の出来事を忘れることはきつとないだろう。